

歴史的建物の建築金物について - 7 「ヨーロッパの金物あれこれ」 大平 茂男

今回の金物は、私が今年の1月、初めて訪れたヨーロッパで見かけた金物を取り上げます。見たままの感想程度の内容ですが、勘違いや間違いもあると思いますので、ご指摘いただければ幸いです。

訪れたのは主な都市はウィーン、プラハ、ブラチスラバ、ブダペストです。私が共通して感じたことは、歴史を考えれば当たり前なのですが、鉄の扱いに慣れていることと、デザインがシンプルであることです。

格子や蝶番でも、建物が木造ではないので金物をビスで止めるのではなく、直接躯体から持ち出して余分な枠やプレート等はいっさい付けていないので、私の感覚からするとすっきりして見えます。また、現代の建築においても鉄とガラスの使い方はうまく、特にガラスは単体で自立させ、取付金物も最小限なので、ガラスの特徴が良く活かされており、シンプルで美しく見えます。

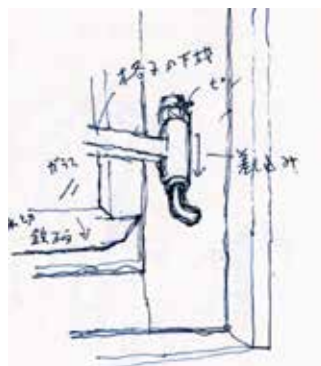
一番感動したのは、雨樋の鋳鉄製の受枠で、意匠的にも、ゴミ溜と縦樋のメンテナンスなど機能的にも優れたものが、既製品として使われていたことです。ふだんの仕事でも、縦樋と地中排水管をメンテナンスし易く、しかも意匠も良く納めるのに困っていたので、これは私にとって収穫でした。

鉄格子の取付金物

ウィーンの古いビルの窓にある鉄格子は、窓枠から出ている一本のボルトに格子を単純に差込んでナット締めしている大変シンプルな納まりです。



中央ヨーロッパに位置する各都市は、ユーロ圏なので国境の検問はなく、自由に行き来できる



筒状の格子の端部を刺してナットで締め、緩まないようにボルトの先端にピンを刺している

雨樋の鋳鉄製の受枘

雨樋が地中排水管に接続する部分には、鋳鉄製の小さな受枘の製品が何処の都市にもありました。縦樋の材質は鉄製や銅製等がありますが、太いしっかりしたものです。屋根に降った雨は、軒樋に流れて集水枘で集められ、縦樋を落ちて地上の蓋のついた小さな鋳鉄製の受枘に接続します。

この枘は、スケッチの通り縦樋と地中排水管を接続する位置に設けられています。雨水を縦樋から少し横に流す役目と、流れしてきたゴミを溜める機能、さらに縦樋のメンテナンスも行うことができます。意匠的にも地面に埋め込まれるので優れています。



プラハ城の受枘、綺麗に納まり蓋を開けるとメンテナンスができる



受枘を開けた状態、中のコードは縦樋に入っているが用途はわからない

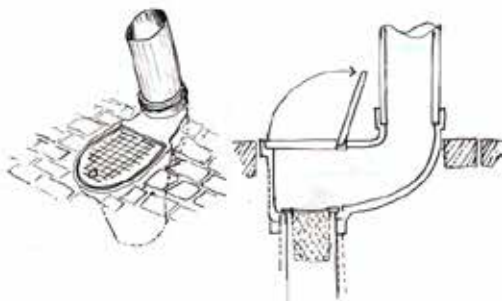


雨樋の集水器

雨樋の集水器は銅板で造られており、形状は様々です。軒の出がなく、雨樋は外壁の最上部に、繰型の飾りの内側にある場合が多いので、集水器は壁面側を平らにしてピタリと壁に付けているか、あるいは壁面にへこみを造って丸型の集水器を付けています。特徴としては、住宅であっても縦樋の径が太いことと、大きな屋根の場合は集水器が詰まったときのオーバーフロー管を設けていることです。



チェスキークルムロフで一基だけ地上に出てしまっていた受枘



鋳鉄製で縦樋の雨水を横に流し、そこでゴミを溜る役目をしている。ゴミ溜はステンレスのカゴが入れてあるところもあったが、昔は穴の空いた鉄製と思われる



チェスキークルムロフ（チェコ）での集水枘デザインは様々であるが、比較的大きくてオーバーフローの配管が出ている

門扉の金物

大きな鋳物や鉄製の門を沢山見かけました。シェーンブルン宮殿の正門は、軸吊で門扉の先端に取付けた戸車がアール状のレールの上を動きますが、戸車の両側には小石を掃除する刷毛が付いていました。

ブラハの集合住宅の門は門柱と金物、門扉を一体で造っています。また、ブラチスラバでの門扉では、軸受け金物と扉の支柱を併用したシンプルで機能的なものを見かけました。建物の壁に直接蝶番の金物を取付けているので枠がなく、通路の連続性が保たれています。

煽り止金物

ブダペストの王宮の丘で見かけた住宅の窓の煽り止金物です。可愛い金物ですが、機能的でちゃんと窓をつかんでいます。金物のデザインは長い歴史に洗練されたものではないかと思われました。

宮殿の新しい間仕切

シェーンブルン宮殿の中に、元々扉等がなかった場所に、見学者の通行を止める目的で新しく設けられたステンレスとガラスの間仕切は、意匠的にも機能的にも感心しました。

建物の壁から浮かしたステンレスの板をドア枠として固定し、さらに浮かしてステンレスの溝形鋼の奥にガラスが嵌め込まれ建具となっています。また、支点を内側にずらしたピボットヒンジで開くようです。歴史的建物に新しく付加する部位のデザインの好例と思いました。



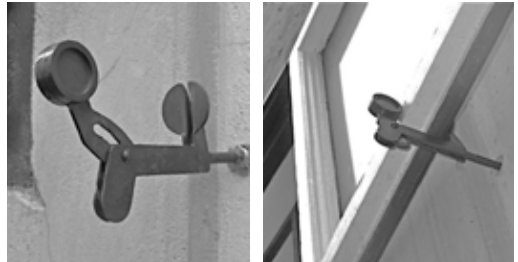
シェーンブルン宮殿の正門の軸受け金物（右）と門扉の先端の戸車前に付けられた刷毛（左）



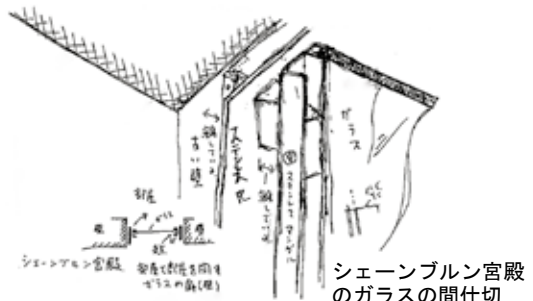
ブラハのアパートの門で、枠と丁番、建具が一体でつくられている。錆びているが現役



ブラハの露地にある門と機能のみの単純な金物。右の2枚はブラチスラバ（スロバキア）



ブダペストの住宅で見かけた窓の煽り止金物

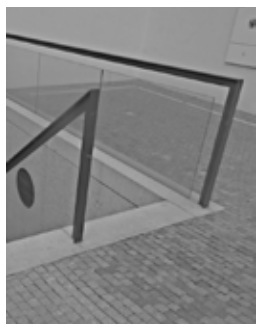


シェーンブルン宮殿のガラスの間仕切

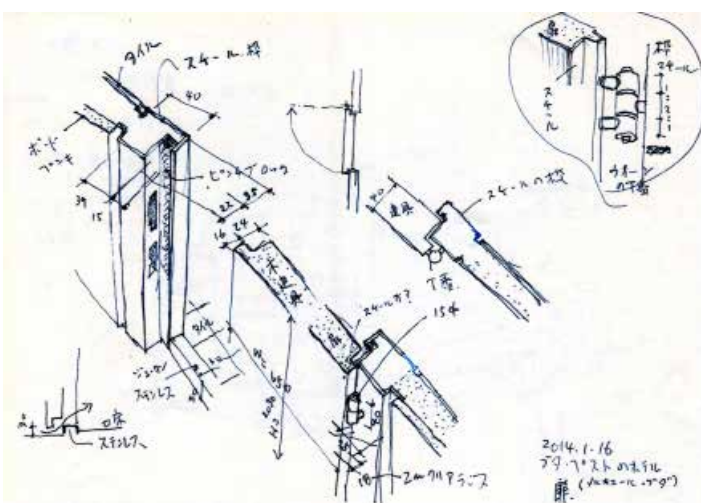
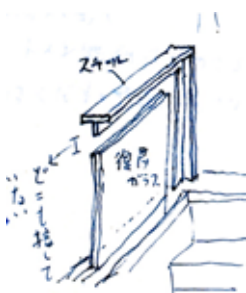
ガラスと手摺

ブラチスラバ城で見かけた復層ガラスと鉄骨の手摺は、一見鉄骨の中にガラスが入っているように見えますが、ガラスと周囲の鉄骨は何処にも接していません。このように現代建築には手摺や庇等にガラスを多く使っていますが、ガラスを枠に入れることに縛られていないので、シンプルで洗練された納まりが多いと感じました。

もう一点は、プラハ城内の古い建物の窓の外に付けられたガラスで、内開き窓の手摺と思われませんが、これもシンプルな納まりです。



ブラチスラバ城で見かけたガラスと鉄の手摺



ホテルの洗面所の間仕切壁のドア枠と建具、薄い壁とドアの納りはシンプル

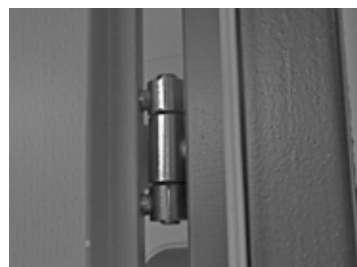
ホテルの洗面所ドアの蝶番

スケッチは、ブタペストのホテルメルキュール・ブダの洗面所入口です。ドア枠はスチール製ですが、片面がタイル張りであるにもかかわらず、ドア枠面と壁の仕上面を平に揃えて壁の厚さを約57mmで納めています。そこに見込40mmのドアが壁の外側に16mm被る形で納まっています。

使われていた蝶番は15mmφ×40mmの肘金物で、巾16mmのドアの大手部分に付いています。建具は木製か金属製かわかりませんが、ウイーンのホテルでは、外周に金属が廻る建具でしたから、おそらく同じ造りと思われる。大きな扉を金属製の細いドア枠に2箇所金の物で支えられるのは、精巧で丈夫な金物があつての納まりです。



プラハ城内の古い建物に付けられたガラスの手摺



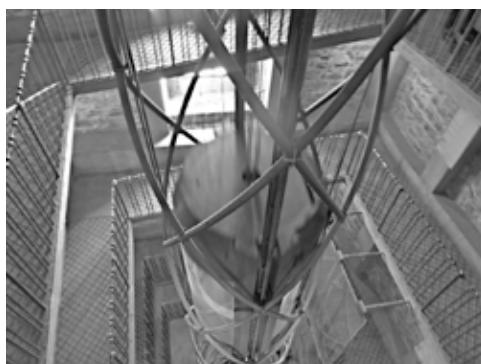
ウイーンのホテルのドア枠と金物

エレベーターシャフト

ブラハの旧市街庁舎の時計塔に登るエレベーターは、廻り階段の中央に設けられており、パイプを螺旋形に組み合わせたシャフトの中をガラスの円筒形のカゴが動く斬新なものでした。煉瓦造りの歴史的建物ですが、細いパイプの構造は反対側が透けて見えるので、廻り階段と煉瓦の壁が途切れることなく見えています。室内の空間の感じを大きく変えずに近代設備を付加し、さらに、それ自体も美しく見せている好例と感じました。

肘金物

古い建具は、日本で肘金物と呼ばれている金物が使われています。建物側には下に長く飾りを施した肘ガネがあり、建具側の肘ツボを受けています。共通しているのは、建具側の肘ツボにはほとんど飾りがなく、肘ガネに対して従の扱いで、回転する機能のみと思える程シンプルです。日本の土蔵の観音開きの土戸や、大きな門の扉に使われている肘金物は肘ガネと肘ツボが大きさも意匠も同じですが、こちらは扉を掛ける感じで、扉に対する考え方が違うのかもしれませんが。



ブラハ旧市街庁舎のエレベーターシャフト。大戦で焼け残った高さ 69m の時計塔の展望廊下まで上がれる



ブラハ



ブラチスラバ



テルチ



チェスキークルムロフ



ブラチスラバ